

涙と共に種蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる。 (『詩篇』一二六篇5節)

いつの時代にも、幸福な人生を送る人がいて、不幸な人生を強いられる人がいる。なぜ、そうなのか。それは人類が繰り返してきた問いでもある。旧約聖書がこれに与えた模範解答は次のようなものであった。神を畏れ、律法を守る者は幸福な人生が約束されるが、神をないがしろにし、律法をふみにじる者には災いがくだされるのだ、と。しかし、因果応報の論理に立つこの解答は、悪人が栄え、義人が苦しむ現実の前に、意味を失う。不当な苦難に打ちのめされた人には何の解答にもならないのである。

旧約聖書は、しかし、これに代わる別の解答を用意しなかった。その代わりに、不当な苦難にあえぐ個人の嘆きや訴えを伝えている。ある詩人は「わが神、わが神、なぜ私を見棄てられたのか」と訴える。別の詩人は「わが涙に沈黙しないでください」と嘆願する。

突然の苦難に見舞われた義人ヨブは「神が私を打ち砕いたのだ」と嘆く。自分ではどうにもできない苦境に立たされたとき、彼らは悲痛な嘆きの声を上げて、これを神に訴えたのである。神に向かって訴えるなかで、神の意思を問い、自らをみつめ、そしてそこから、それぞれの解答をひきだしていったのである。このような信仰の消息は、旧約聖書に収められた祈りのなかに数多くみられる。それは、人生をなるようにしかならぬ運命とみて、これを達観する諦めの境地とは対極をなしている。